

《柳鷺群禽図屏風》に表れた呉春の制作意識

—描法とモチーフの検討を中心に—

仁方越洪輝（京都大学）

呉春（1752～1811）は与謝蕪村（1716～83）の門人であり、蕪村に近い作風で作品を制作していたが、蕪村が没して以降は円山応挙（1733～95）のもとに出入りして晩年期の画風を確立したとされる。呉春筆《柳鷺群禽図屏風》（京都国立博物館）は全体として蕪村風の作品ではあるものの、応挙の影響を強く読み取る研究者もおり、なお検討を要する。そこで本発表では、本作の描法を再検討して蕪村風が顕著であると改めて確認した上で、本作に強く表れた蕪村門人としての呉春の意識を明らかにする。また、モチーフ選択には呉春の特質も窺える点を指摘する。

本発表ではまず、年紀落款を伴う呉春作品との比較を通じて本図が天明6年（1786）頃の制作と考えられることを示す。また、本図に用いられた描法を検討し、蕪村作品にかなり近い描き方がなされていることを再確認するとともに、蕪村作品と異なる写実性が表れた部分に関しても、描法という観点では蕪村作品との大きな隔たりはない点を指摘する。加えて本作には蕪村から譲られたとされる「三菓堂図画印」が捺されているが、これも蕪村を強く想起させる要因である。印章や描法からは、画号を受け継いだ蕪村門人としての意識が垣間見えるが、周囲の人々も呉春を蕪村門人と認識していたことが知られる。応挙一門による障壁画制作に呉春も参加した際の覚書（天明7年〈1787〉、大乘寺文書）には、呉春が「蕪村高弟」とあり、蕪村が没して数年経った時期にも呉春が蕪村門人として周囲から理解されていた様子が窺える。《柳鷺群禽図》を天明6年の作とするならば、旧所蔵者が滋賀県大津市の人物であった点も注目される。蕪村門の俳人も多くいた近江の俳諧ネットワークに属する人々により鑑賞された可能性も想定できよう。本図は、「三菓堂」を継いだ絵師としての状況と自覚のもとに制作された、蕪村門人時代の集大成ともいえる作品である。

蕪村門人としての意識が見られる一方、本図には呉春の特質も表れていることをモチーフの検討を通じて指摘する。本作右隻に描かれた白黒の鳥の種類はこれまでに確定されていない。本発表では、この鳥がコクマルガラスという鴉の一種であると明らかにする。鴉と蕪村との間に連想関係があったとされる点も、本図の蕪村への意識の表われと見なせて重要だが、全身の黒い一般的な鴉ではなくコクマルガラスを選んだ点には呉春の独創性が指摘できる。すなわち、コクマルガラスは寒い時期に見られる冬鳥として、草木の枯れた情景を描いた右隻に相応しく、巧みな季節感表出に一役買っているのである。身近な動植物をも描き込んだ分かりやすさと実感を伴った季節感表現には、俳人もあった呉春の特質が顕著に表れている。本作は、応挙への接近を強めた蕪村没後にも蕪村門人としての制作が呉春に求められた可能性を示唆している。しかしそれだけでなく、モチーフ選択には呉春の特質も表れている重要な作品であると主張したい。